学校事例

自己肯定感と多角的な視点を生徒に育む指導とは

座談会では、「軸」をつくり、「修正」する力を高めるためには、「自己肯定感」や「多角的な視点」の育成が求められるということが、先生方の共通認識として確認された。では、それらを育むために、高校段階ではどのような指導が求められるのか。地域性や生徒の気質、進学実績などが異なる3校の取り組みを紹介する。

北海道・私立札幌日本大学高校

「N.DREAM PLAN」でPDCAサイクルを自然に身に付ける

将来、どのような社会であっても生き抜いていけるように、自分で考えて行動できる力を身に付けてほしい。そうした思いから、札幌日本大学高校は、進路学習や定期考査などにおいてPDCAサイクルを繰り返す「N. DREAM PLAN」を考案し、2013年度から始めている。

生徒に考える力、自己管理能力を付けたい

札幌日本大学高校は、北海道札幌市に隣接する北広島市に位置する共学の私立高校だ。主に国公立大進学を目指す「特進コース」「中高一貫コース」と、主に日本大及び私立大進学を目指す「総合進学コース」から成る。2013年度からは、目指

図1 「N.DREAM PLAN」の内容

- **N.Data**
  卒業生の模試成績推移とセンター試験の成績、受験校とその結果などのデータや合格体験記、日本大の各学部・学科の紹介と推薦基準などを掲載する進路に関する情報誌。年1回配布。
- **N.Report**
  生徒・保護者に配布する進路通信。月1回発行。大学情報や模試結果、学習時間調査の結果などを掲載。学年ごとの情報を3学年分同時に掲載し、1・2年生が次年度に向けての意識を持てるようにしている。
- **N.Explorer**
  職業研究や学問研究などを行う進路学習教材（ベネッセの『進路サポート』）。毎週月曜のLHRや宿泊研修で活用。生徒個々で調べたり、生徒同士で話し合ったりしながらワークシートに書き込み、自分を見つめ、将来を考える材料とする。
- **N.Assist**
  学年ごとに1年間の学習を記録する冊子。年間目標を立て、定期考査や模試の度に、目標得点、計画、得点、反省、今後の抱負などを書き込む（P.12 図2参照）。得点は折れ線グラフに書き、得点推移がひと目で分かるようにしている。2年生では「志望校宣言」も行う。
- **N.Manager**
  1週間の計画と実行状況を書き込む手帳。週末には1週間の振り返りを書き、担任に提出。担任はコメントを書いて返却する。相談事を書く生徒もおり、生徒と担任の交換日記のような役目も果たす（特進コースのみ）。

「N.Explorer」と「N.Assist」は、その他の資料と共に3年間の記録をまとめられるよう、1人1冊のファイルに綴じている。

自己肯定感を高める教育活動のトータルデザイン

す育成人材像に「世界に貢献する人」を掲げ、優れた人間性と実力、夢や自信を持たせる教育を行う。

その一環として、同じく13年度に始めたのが「N.DREAM PLAN」だ。「N. Data」「N.Report」「N.Explorer」「N.Assist」「N.Manager」の5つで構成される（**図1**）。その特徴は、様々な活動を通してPDCAサイクルを繰り返し、生徒が考える習慣や自己管理能力を身に付けられるようにしている点だ。「N.DREAM PLAN」を立案した進路指導部長の成田憲紀先生は、次のように説明する。

「生徒が社会に出てから必要となる力を考えた時に、考えて動く『考動力』がとても大事になると常々考えていました。10年後、20年後の日本がどうなっているのかは分かりません。その不透明な社会を生き抜くために、自分で考えて、適切な行動が出来る力を、生徒に身に付けさせたいと思ったのです。高校生の段階から考える習慣を付け、自己を管理する経験を積み重ねられるようにしようと、他校の取り組みも参考にしながら、1つひとつの活動内容を考えました」

それまでも、担任が個々に進路学習や家庭学習時間の記録などの活動を行っていた。それらを取りまとめ、学校全体で推進するために、3年間を見通した進路指導システムを体系化した。更に、成田先生が教師一人ひとりに内容を説明し、改善点を聞き取っていった。新しい取り組みをより良い形で始めるために、担任が運用しやすいようにすると共に、生徒に考える力や自己管理能力を身に付けさせるという狙いを、学校全体に浸透させる目的もあった。八木和彦教頭は、次のように話す。

「社会で活躍し、世界に貢献する人材となるための基礎を築くのが高校3年間です。今の段階でよいので、自分の人生をしっかり考えてほしいと思いました。その実現のためにも、学校として進路学習を体系化し、どの教師がどの学年を受け持っても指導を保障できるようにすることが重要です。ただ、新しい取り組みですので、教師の負担は確実に増えます。導入に当たっては、教師全員の納得が得られるように、職員会議で何度も趣旨を説明しました」

「考え、書き、振り返る」を何度も繰り返す

「N.DREAM PLAN」の中心となる取り組みは「N.Explorer」「N.Assist」「N.Manager」だ。

● N.Explorer

進路学習教材の冊子であるベネッセの『進路サポート』を活用。3年間の実施計画を立て、毎週月曜のLHRや宿泊研修などで、生徒同士が話し合ったり、職業や学問について調べ学習をしたりしながら、自分を見つめつつも視野を広げていき、将来を考える材料にする。

「以前から、進路ガイダンスや大学の出張講義、外部講師による講演会などを行い、生徒に進路情報を提供していましたが、学んだことをアウトプットする機会はほとんどありませんでした。『N.Explorer』によって、インプットした情報を取捨選択し、自分の考えとして書いて残せるようにしました」（成田先生）

入学時の早い段階には、「自分を知り、それを相手に伝える」というグループエンカウンターを行う。自分を見つめ、その上で他の生徒の話を聞くことによって、他者を尊重しながら人間関係を築く姿が見られる

札幌日本大学高校教頭
八木和彦　やぎ・かずひこ
教職歴27年。同校に赴任して28年目。「生徒の可能性は無限。在学中、いろいろなことに挑戦してほしい」

札幌日本大学高校
成田憲紀　なりた・のりき
教職歴13年。同校に赴任して14年目。進路指導部長。「後生畏るべし。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや」

札幌日本大学高校

◎北海道日本大学高校を創始とし、1987（昭和62）年開校。校訓は「創造・敬愛・剛健」。特進コース、総合進学コース、中高一貫コースがある。2012年度から5年間、スーパーサイエンスハイスクールの指定校。

◎**形態**　全日制／普通科／共学

◎**生徒数**　1学年約360人

◎**2014年度入試合格実績（現浪計）**

国公立大は、北海道大、東北大、京都大、大阪大などに74人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、日本大などに延べ385人が合格。

◎**URL**　http://www.sapporonichidai.ed.jp

ようになったという。

● N.Assist

定期考査と模試の結果を1年間継続して記録する冊子。年度初めに1年間の学習目標を立て、その後は定期考査や模試ごとに、目標得点と試験に向けた学習計画、得点と反省、今後の抱負などを書く（**図2**）。進研模試では、志望校の合格ラインを基に目標点を書くように指導し、入試では何点取らなければならないかを意識させる。また、得点は折れ線グラフにし、1年間の得点推移を把握できるようにしている。それらの書き込みもLHRで行っている。

「生徒が『学力を向上させるためには、何をすればよいのか』を段階的に意識するようになればと考え、そのような形にしました。定期考査や模試で目標を立て、それを確実に達成するスモールステップを積み重ねて、自己肯定感に結び付けることも意識しました」（成田先生）

2年生11月には「志望校宣言」を行う。その時点での志望校を決め、志望理由書を書くというものだ。担任が点検し、内容が不十分であれば何度も書き直しをさせ、OKが出たら清書する。この宣言を学年団で共有し、日頃の指導に生かす。

「『入試で面接官に話せるくらいきちんと書くように』と指導しています。『真剣に自分と向き合う機会になった』という生徒もいるほど、将来を考える大きなきっかけになっているようです。教師にとっては、『N.Explorer』や授業などでのインプットの成果が表れる機会でもあります」（成田先生）

● N.Manager

見開きで1週間分の予定を書き込む手帳。翌週の予定を見ながら家庭学習の計画を立て、実際に行った学習時間を教科ごとに毎日記録し、週末には1週間の振り返りを書いて、担任に提出する。担任は生徒一人ひとりの手帳を点検し、コメントを書いて返却する。手帳に時間目盛りがあるため、時間管理の考え方を学びやすく、また、立案・実行・反省・改善を1週間という短期間で何度も繰り返すことによって、自己管理の術を体得していく。

「実際、生徒自身で学習時間の少なさに気付き、改善・修正していく姿がよく見られます。実行したことに線を引くなど、自分なりの使い方をする生徒もいます」（成田先生）

図2　「N.Assist」定期考査・模試の記録表

上の図は、定期考査の学習記録表だ。試験科目ごとに、目標得点、得点、平均点を書き、試験前には学習の目標を、試験後には反省点や改善点を書く。そして次の考査の目標や学習内容を書き込む。

下の図は、模試の記録。定期考査と同じような流れで、目標偏差値、事前の学習内容、結果と反省点・今後の抱負を書く。自己採点を書き込むシートも付いており、試験後はすぐに自己採点をして、模試の復習が出来るようにしている。

＊学校資料をそのまま掲載

可視化が課題認識を深め自己肯定感を高める

このように、「N.DREAM PLAN」では、生徒が調べ、考え、書き、教師が内容を点検し、生徒は自分が書いたものや先生のコメントを見て振り返るという過程を何度も繰り返す仕組みになっている。しかも、志望校検討という大きなPDCAサイクルか

ら、1週間の計画という小さなPDCAサイクルまでを教育活動に組み込み、生徒全員が日常的に経験できるようにしている。

「自分の将来を考えたり、定期考査の結果を振り返ったりすることを、生徒が家で1人で行うのはなかなか難しいと思います。授業で行えばきちんと取り組みますし、友だちの考えを知って気付きを得たり、視野が広がったりして、自ら深く考えられるようになるでしょう。実際、生徒に考える習慣が付いてきたと感じています」（八木教頭）

成田先生は、一連の取り組みを通して、「言語化して残す」ことの必要性を実感していると話す。

「例えば、定期考査に向けての目標を設定し、結果を各自で分析し、課題を書いて可視化することで、生徒は次に向けて何を修正すべきかを考えやすくなっているようです。また、進路学習でも、考えを書き残し、次の活動でそれを見ることで、自分が考えてきた過程を振り返りやすくしています。本当にやりたいことは何か、自分の軸を考えるきっかけになっています」

「N.Explorer」「N.Assist」は、1冊のファイルに3年間分をまとめて保管。それを見れば、入学時からの成績推移や進路への考えなど、自分の変化を振り返ることが出来る。

「入学時からの自分を振り返って、何かに気付いて次の行動につながることもあるでしょうし、その積み重ねが自己肯定感を高めることにもなるでしょう。紆余曲折を経て、いろいろ考え、自分自身をつくっていく。考えるのは生徒自身であり、ものの見方を広げさせて、考える環境をつくり、支援するのが我々教師なのです」（八木教頭）

生徒が視野を広げ、考える材料としては、「N.Data」で先輩の成績推移や合格体験記、大学の情報などを提供し、進路通信である「N.Report」では、模試分析や学習時間調査の結果、進路イベントなどの情報を時期に合わせて伝えている。他に、以前から行っている進路ガイダンスや大学の出張講義などを継続している。

把握した生徒情報を基にカンファレンスを実施

「N.DREAM PLAN」によって、生徒の考えや状況を正確に把握できるため、面談で何を話すべきか、どのように声を掛けるかなど、生徒一人ひとりに応じた指導がより具体的に的確に、そして素早く出来るようになった。

例えば、模試の結果から予想して「学習時間が少ないのではないか」と言うのではなく、「N.Manager」で学習時間を把握し、「学習時間はどうか」などと気付きを促せる。手帳に書かれた学習時間は、担任または副担任がパソコンに打ち込み、学級ごと・学年ごとに集計。その結果を進路通信に掲載する。他クラスと比較して発破をかける担任もいる。

学年団が、把握した情報を基に生徒一人ひとりについての指導法を話し合う「カンファレンス」を行うようにもなった。以前は、そうした機会は3年生で受験校を決定する段階での進路志望検討会だけだったが、今年度は9月までに3年生のカンファレンスを3回開いた。時期や回数などは決めておらず、今年度は3年生で行い、ある程度形になったら、今後1年生や2年生でも行う予定だ。

「カンファレンスで話し合った結果は学年としての指導方針となりますから、経験が浅い教師でも自信を持って指導に当たれるようになりました」（八木教頭）

PDCAの考え方を他の場面でも使えるように

「N.DREAM PLAN」を始めて、今年で2年。生徒の進路意識は以前より高まり、よりたくさんの情報を求めて積極的に行動するようになっている。担任に進路について自ら相談に来る生徒や、大学の合同説明会に参加する生徒が増えている他、2年生の『志望校宣言』では、それまでの進路学習でよく考えられているからか、下書きのチェックが一度で済む生徒が少なくないという。

同校では、学園祭やスポーツフェスティバルなどの行事を生徒が企

画・運営し、修学旅行ではグループで計画・行動する自主研修の日を設ける。部活動も加入率が高く、生徒は毎日練習に励む。そうした様々な活動でも「N.DREAM PLAN」での学びを生かして「考動力」や自己管理能力、自己肯定感を高めることを期待している。

今後の課題の1つは、「N.DREAM PLAN」を学校の取り組みとして根付かせることだと、成田先生は言う。

「実施初年度は、年間計画以外に、私が週の計画を毎週立て、先生方に配布していました。今年は、学年ごとに担当者を付け、週の計画を出すようにしています。そのように段階的に取り組みを浸透させ、進路指導部の担当者が変わっても、どの先生がどの学年の担任となっても活動が続くようにしたいと考えています」

八木教頭もこれからの展開を次のように話す。

「生徒には最初にPDCAサイクルの考え方を説明しましたが、そう簡単に意識できるものでもありません。将来にわたって必要な力を育む取り組みとして粘り強く継続していきたいと思います」

神奈川県・私立聖セシリア女子中学・高校

様々なツールを活用し生徒に気付きや修正を促す指導を徹底

聖セシリア女子中学・高校は、「学習、体験、活動、思索」を深めていく中で、生徒が自ら修正点に気付き、行動できるよう、面談や声掛けを重視している。教師が適切な声掛けをするために、学習計画表などで生徒の状況を把握すると共に、教師それぞれの気付きを学年団、学校全体で共有する仕組みも整えている。

失敗を逃さず、生徒が気付き、軌道修正する場に

神奈川県にある聖セシリア女子中学・高校は、カトリック精神に基づく全人教育を基盤とした私立の中高一貫校だ。「学習、体験、活動、思索」の4つの教育目標を掲げ、21世紀をたくましく生きるための心と力の育成を目指している。

変化の激しい社会を生き抜くために生徒が修正力を身に付けることは、同校でも課題の1つとして捉える。進路指導部長の中野路子先生は生徒の特徴を次のように話す。

「与えられたもの、言われたことを素直に受け止め、きちんと行う生徒が多い一方で、失敗を次につなげることが苦手で、失敗そのものを恐れる生徒も目立ちます。今後、社会はますます複雑になり、失敗せずに生きていくことは出来ないでしょう。自分で状況を捉え、主体的に切り込んでいく力の育成が必要だと感じています」

変化に対応できる力を育てるために同校が意識するのが、生徒自身が活躍する場の提供だ。学校行事の運営や部活動などを通して、「自分も出来る」という自己効力感を高め、「こうすればもっと伸びる」と生徒自身に気付かせることで、修正力を養っていく。

例えば、生徒が企画・運営する青葉祭（学校祭）では、実行委員の連絡が行きわたらず、各学級が実行委員の意図しない方向に動き始めることがある。その時、教師はなぜ失敗したのかを、まず実行委員に考えさせ、根本的な原因に気付かせてから、各学級にフィードバックさせるようにしている。

その時に大切にするのは、教師が答えを教えず、あくまで生徒自身が課題に気付き、自分たちで軌道修正したと思わせることだ。教師は、何がうまくいっていないのかを、生徒に問い掛ける。原因が分かっていなければ、「この方法ならどうだったのか」「別の方法があったかもしれない」というように、少しずつ違う視点を示して考えさせながら問題の本質に迫り、どうすべきかを生徒に答えさせ、行動に移させる。試行錯誤しながらも、自分たちの力で行事を成功に導いたという体験は、自己肯定感にもつながる。

「最初から教師が『こうすれば大丈夫だよ』と教えれば、教師も生徒も楽でしょうし、学校祭は成功する

かもしれません。しかし、それでは、生徒が成長する機会を奪ってしまうことになります。生徒自身に答えを見付けさせるためには、教師がアンテナを張り、生徒の変化を察知しながら、根気強く指導し続けることが大切だと考えます」と中野先生は強調する。

聖セシリア女子中学・高校
中野路子　なかの・みちこ
教職歴27年。同校に赴任して28年目。進路指導部長。「種をまき育て続け、生徒の学力・人間力を伸ばす」

聖セシリア女子中学・高校
笠井理弘　かさい・みちひろ
教職歴17年。同校に赴任して18年目。教務部長。「生徒が将来幸せになれるよう、授業・生徒指導を行う」

聖セシリア女子中学・高校
原野　純　はらの・じゅん
教職歴4年。同校に赴任して3年目。入試広報部。「生徒に自由を与えることで、責任を意識させたい」

聖セシリア女子中学・高校

◎1929（昭和4）年に開校。1980年に現校名となる。「“よりよく生きること”を考え続ける『こころ』を育成し、それを実現へと導く『力』を養いたい」を教育目標に掲げ、学校を人間形成の場として教育活動を展開する。
◎**形態**　全日制／普通科／女子
◎**生徒数**　1学年約120人
◎**2014年度入試合格実績（現浪計）**
国公立大は、岩手大、東京芸術大に2人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ301人が合格。
◎**URL**　http://www.cecilia.ac.jp

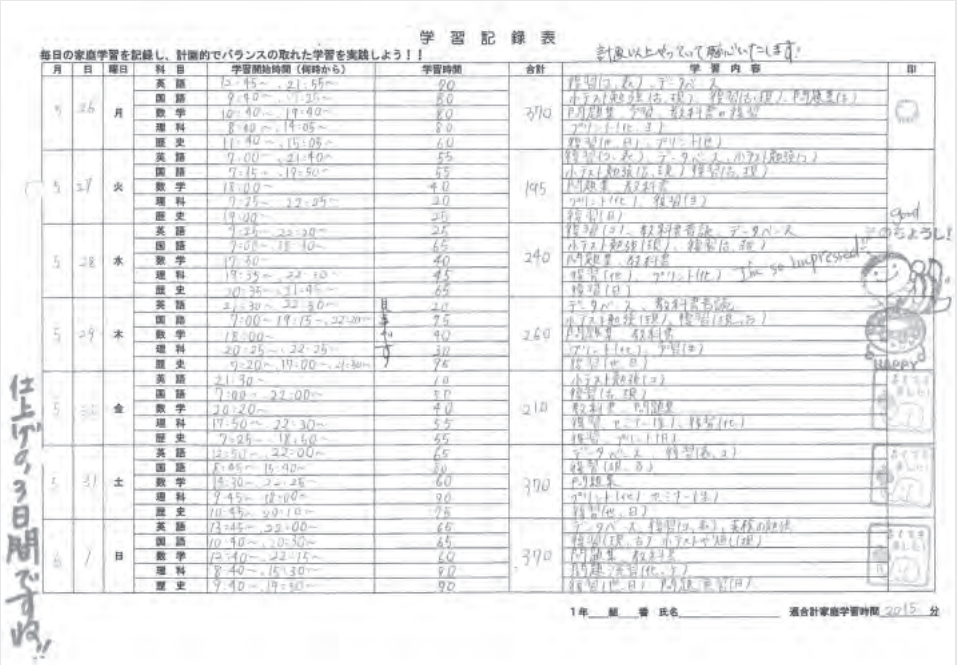
学習計画表を日々の課題発見と成長実感に結び付ける

日々の学習で得られる気付きと成長実感も大切にする。特に効果を上げているのが、中学1年生～高校1年生で行う学習計画表「Recording Study」だ。これは、1週間分の学習計画を立て、実際の学習時間や感想・反省などの達成状況を記入する学習と生活の記録である。家庭学習習慣の定着と進路実績向上を図るために始めたが、生活の課題発見や自己肯定感に結び付くツールとしても機能している。

大きな特徴は、学年を追うごとに徐々に教師が手を放していく仕組みになっていることだ。中学1・2年生では、生活習慣を整えるために、起床から就寝まで1日分の計画を立てるようになっているが、中学3年生・高校1年生では学習計画のみとなる（**図1**）。更に、高校2・3年生では、計画ではなく、事後報告として学習内容・時間の実績だけを記録して担任に提出する。

担任が事前に計画を確認し、学習

図1　「Recording Study」高校1年生の例



高校1年生の「Recording Study」では、5教科それぞれの学習開始時刻・学習時間・学習内容、1日の合計学習時間を書き記す。毎日記入し、朝のHRで担任に提出。担任は検印と、場合によってはコメントを書き、帰りのHRまでに生徒に返す。記入欄は5教科分あるので、生徒も5教科の学習を意識しやすい。
＊学校資料をそのまま掲載

時間が少なかったり、教科・科目に偏りがあったりした場合は、生徒に助言をし、事後に提出させて達成状況を確認する。担任は必ず目を通して生徒の生活・学習状況を把握し、生徒の変化を早めに察知するように努めている。教務部長の笠井理弘先生は次のように狙いを語る。

「以前は定期考査前に学習計画を立てさせるだけで、しかも学習内容や達成状況を担任が確認することもしていませんでした。生徒は真面目なので、計画をきちんと立てますが、そこに時間を掛けてしまい、肝心の学習がおろそかになることもありました。学習計画とその達成状況を可視化し、生徒自身に何が出来て、何が足りないのかを気付かせると共に、継続的に取り組ませて、日常生活に計画・実行・修正というプロセスを定着させたいと考えました」

低学年では、生徒の気付きを待っているよりも、担任が声を掛けて気付かせることが多い。「学習時間が減っている」「時間が固定していない」という変化が見られれば、担任がすぐに声を掛け、修正させる。それを繰り返すことで、計画を立てる習慣が身に付き、自分自身を客観的に振り返る視野の広さが身に付くと考えている。実際、学年が上がるにつれて計画を立てる習慣が付き、計画を立てなければ試験に臨めないという生徒が増えるという。

更に、「Recording Study」は、目標を達成したり、修正がうまくいったりしたことも可視化される。教師はそうした点も生徒に気付かせ、自己肯定感に結び付けている。

評定平均値を自分で計算し目標と現実の差を認識

学習指導でのもう1つの工夫は、「目標と実際の成績」を意識させることだ。同校では高校2年生の時点で、評定平均値と大学合格実績の相関を一覧表にして生徒に示している。2年生は自分で1年生での評定平均値を算出し、志望目標を達成するために2年生でどの程度上乗せが必要なのかを計算する。「漠然とゴールを目指すのではなく、志望を実現するには、具体的な目標を設定し、何をすべきなのかを意識させたいのです」と、2学年担任の原野純先生は語る。

「評定平均値は3年間の取り組みの総合評価となります。高校1年生で目標に対して十分な成績が取れていないのなら、2・3年生で挽回すればよいのです。また、どの教科が出来ていて、どの教科が出来ていないのかを確認して対策を考えることを意識する必要もあります。志望と現状をしっかりと認識して、学習法や生活態度を修正するきっかけにしてほしいと考えています」

生徒が計算した評定平均値は、担任の面談資料にもなる。生徒がきちんと評定を把握しているのか、志望と目標のずれはないのかを面談を通して確認し、気付いていなければアドバイスし、修正させる。生徒は各教科・科目の目標を設定し、日常の学習計画やテスト対策などに反映させる。

「大きい目標だけでは漠然と進んでいくだけ。そのためにどれだけの努力が必要なのかを見極めさせながら、1つひとつ課題をつぶしていくことが学力を向上させると共に、気付く力を高め、修正力を養うことにもつながると期待しています」（原野先生）

職員室を1室にし日常的な情報共有を図る

生徒に気付きを促すような声掛けをしていくためには、教師間における生徒情報の共有も重要となる。

情報共有を円滑に行うための工夫の1つは、職員室の配置にある。以前は中学校と高校の職員室は別々だったが、数年前の校舎改築を機に1フロアにまとめた。

「本校では以前から職員会議での生徒情報の共有は活発でしたが、会議という改まった場よりも、日常会話の中に指導のヒントが隠れていることが多いという意見から、学年に関係なく、教師間の交流がスムーズに行えるよう、職員室を1室にまとめました。中高の壁が取り払われたことで、発達段階に応じた指導の違いも見えてきて、生徒把握が格段に進みました」（笠井先生）

質問や相談で職員室を訪れる生徒も多い。職員室の中央通路はいつも生徒でごったがえし、昼休みなどは通り抜けるのも難しいほどだ。そのような生徒と教師の距離の近さも、教師の生徒把握を容易にしている。

ICTを導入し あらゆる場面で個別指導を

生徒理解のためのもう1つのポイントは、ICTを活用した生徒情報の共有である。同校が活用するシステムは、ベネッセの「授業・学校支援サービス」だ。生徒一人ひとりの模試や定期考査、小テストなどの成績、学習時間や内容、出欠管理、生徒の授業評価の集計、行事や部活動の実績など、幅広い情報をデータで管理し、学校全体で共有している（**図2**）。2014年度に試行的に導入し、15年度から本格的に活用していく予定だ。

「これまで各教科の提出物の状況や小テストの結果などは、教科担当が一定期間内に集計し、担任にフィードバックして、指導が必要な生徒の情報を共有していました。システム導入後は、そうした集計結果がリアルタイムで見られるようになります。担任はホームルーム以外でも生徒の様子を把握できるため、より深い生徒理解が可能になると期待しています」（笠井先生）

生徒の志望校の情報も共有できるため、教科担当の視点から「この生徒ならもっと高いところを目指せる」といった会話を日常的に交わすことも可能になる。これまでは担任が教科担当に相談して、生徒の実力や課題を1つひとつ把握していたが、そうした情報交換がより効率的に行えるようになる。

システム導入を決めた背景には、個別指導の重要性への認識がある。

「生徒が自身の実力や課題にどこで気付くのかは、一人ひとり異なります。生徒たちの成長を促すためには、学校生活のあらゆる場面で個別指導を徹底することが重要です。教師は生徒一人ひとりを多面的に捉え、その情報を共有することで、様々な角度からアドバイス、応援、励ましの声掛けをして、気付きを与えていきたいと思います」（中野先生）

失敗経験を含めて もっと試行錯誤させる場を

学習計画や個別指導の徹底などによって、学力の底上げ、進学実績の向上が見られたのは、ここ数年の大きな成果だ。中学2年生や高校1年生の時に成績が下がることが毎年課題であったが、14年度、初めて中学2年生の成績が下げ止まった。更に、

図2　「授業・学校支援サービス」の記入例

聖セシリア女子中学・高校では、「授業・学校支援サービス」を活用して、生徒一人ひとりの情報を集約している。「近況」「指導履歴」「進路」「成績」「基本情報」の5項目があり、面談時、生徒に細かな情報の確認をしなくても、これを見ながら話を進めることが出来る。また、その面談の内容も、指導履歴に残すことが出来るため、前回の内容を振り返りながら、話を深めていきやすいという。

＊学校資料をそのまま掲載

長年、同校が目標に掲げてきた「難関大合格率40％」という進学実績も達成した。

教師の意識も変化している。

「次年度の『授業・学校支援サービス』の全面導入を見据え、教師全員が少なくともパソコンを、またタブレットも一部使用するようになったのは大きな前進です。また、好調な進学実績の背後には個別指導があることに気付く教師も多く、面談などに力を入れる姿が見られます。次年度以降、ＩＣＴが更に有効に活用されることを期待しています」（中野先生）

今後の課題は、生徒自身がより主体的に課題を見付け、修正していく力を高めていくことだ。

「例えば、学習計画においても、教師が先回りして修正を加える場面がまだ見られます。失敗経験を含めて、生徒が幅広い視野で自分を見つめて、考える場面を与え続けること、その結果を教師が共有して、生徒の成長につながる効果的な声掛けをしていく体制を築いていくことが、ますます重要になると思っています」（笠井先生）

長崎県立長崎西高校

教育方針・生徒把握を徹底共有し自律を育む活動を全校で推進

「志高く、夢かなう長崎西」をキャッチフレーズとして、生徒の可能性を広げる指導を展開する長崎県立長崎西高校。校訓である「自律」した人間の育成を目指し、全ての生徒に指導方針を浸透させ、学年団では常に生徒の状況を共有し、生徒に考えさせ、気付きを促し、自ら修正していく指導を行う。

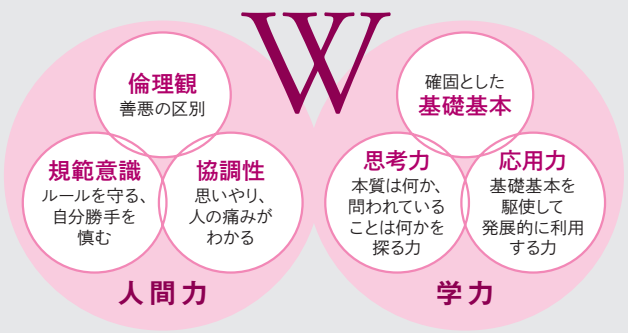
卒業時の自律した姿を入学時から生徒に伝える

長崎県立長崎西高校は、国公立大に毎年２５０人以上が合格する九州を代表する進学校だ。２０１４年度入試では、目標である２桁に届かなかった東京大合格者が14人という躍進を遂げた。普通クラス、理系コースに加え、２０１１年度には、３年生に「東大クラス」を設置。東京大を第１志望に掲げる生徒を学力や文理に関係なく１クラスにまとめ、全校体制で学力・精神の両面で生徒を鍛え上げ、最後まで目標を諦めない指導を徹底してきた結果だった。統括主任の野村雄大（たけひろ）先生は、その背景にある同校の教育方針について次のように語る。

「本校が目指すのは、日本や世界の平和と発展に貢献していく人間の育成ですが、目の前の壁に歯を食いしばって立ち向かい、自らの力で打ち破って前に進めるような人間こそが、社会に真に貢献できると考えます。しかし、本校の生徒は、優秀であるが故に、中学時代まで叱られることや失敗したという経験があまりありません。力のある生徒たちの可能性や夢を更に広げるためにも、志を高く掲げて何事にも取り組ませ、そこで壁にぶち当たっても厳しく鍛えて伸ばし、３年間で校訓でもある『自律』した人間へと育むことが、本校の教育の土台にあります」

10年後の社会がどのようになっているのか分からないからこそ、確固とした基礎学力と心豊かでたくましい人間力が必要であるという考えを図にして（**図１**）、生徒全員に配布する「進路のしおり」に掲載。入学直後の新入生合宿では、なぜそうした力が必要なのかを説明し、卒業までに自律した人間になることが目標

図１　長崎西高校が目指す「生徒に育てたい力」



＊学校資料を基に編集部で作成

であると明言する。生徒がその目標を実感する機会は、西高祭や運動会、部活動などだ。学年横断で活動する

長崎県立長崎西高校
野村雄大　のむら・たけひろ
教職歴24年。同校に赴任して12年目。統括主任。「人生の基礎の一端を高校3年間で築いてほしい」

長崎県立長崎西高校
堀　光　ほり・ひかる
教職歴18年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「生徒一人ひとりの可能性を信じる」

長崎県立長崎西高校
副島俊彦　そえじま・としひこ
教職歴14年。同校に赴任して4年目。進路指導部副主任。「生徒を信じて粘り強く行動し続ける」

長崎県立長崎西高校

◎日本や世界の平和と発展に貢献するために、学力・体力・文化力を併せ持つ心豊かでたくましい人間の育成を図る。普通クラス、理系コース、東大クラスを設ける。2005年度からスーパーサイエンスハイスクールの指定校。
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1・2学年各280人、3学年307人
◎2014年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大、長崎大などに265人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ240人が合格。
◎URL　http://www.nagasaki-nishi.ed.jp

中で、先輩が自ら考えて行動し、交渉したり工夫したりする姿を見て、憧れを抱き、自分もそうなりたいと、学校生活に力を尽くすようになる。

教育方針の共有は、教師間でも常に行っている。進路指導主事の堀光先生は、その重要性をこう話す。

「本校赴任1年目でも本校の教師として指導できるよう、前期・後期報告会や職員会議など教育方針や他学年の活動状況を共有する機会が多くあります。1・2年生の指導が3年生でどう生きてくるのかも分かり、卒業時までにどのような生徒に育てるのかを、1年生からイメージして指導しています。ですから、教育方針と指導状況とを照らし合わせて、『今の指導を続けてよい』『ここは修正しよう』と考えられるのです」

自律を体現する場を日常生活や行事に設ける

かつては、自律を「何でも自由」とはき違えた意味に捉え、容儀は自由、受けたい大学をそのまま受けるという生徒を、教師が容認していた時期があった。しかし、「生徒指導の充実」を根幹に据え、1年生ではあるべき姿を教え、部活動で中心を担うようになる2年生で少しずつ手を離し、3年生で行事等の運営を任せていくというのが、3年間の指導ストーリーだ。進路指導部副主任の副島俊彦先生は説明する。

「本校が目指す人間像にふさわしくない言動は、厳しく叱り、なぜ駄目なのか、どうすればよいのかを諭し、考えさせます。1年生から繰り返し粘り強く指導し、また多くの人の話を聞く中で、それが社会で求められる姿なのだと徐々に理解し、3年生になれば納得して自ら動くようになります」

生徒の自律した姿が最もよく表れるのが、9月に行われる運動会だ。学年縦割りの4チームによる対抗戦で、組体操やパネルなど、種目ごとに学年混合のチームを作り、3年生が練習や準備を率いる（図2）。

「運動会は種目が多く、普段は目立たなくても力のある多くの生徒たちがリーダーを担って活躍します。

図2　自律を体現する取り組み

● **西高祭**
毎年8月実施。文化部および同好会が1年間の活動の成果を発表すると共に、1・2年生の各学級がそれぞれ工夫を凝らした催しを行う。学級の団結力を高める行事の1つ。

● **運動会**
毎年9月実施。学年横断で4チームに分かれ、3年生をリーダーに各チーム趣向を凝らした熱戦が繰り広げられる。2年生の「西高パレード」、3年生の「もしも教師でなかったら…」は、同校独自のユニークな種目として、その伝統が受け継がれている。

● **無言清掃**
毎日6時間目終了後、音楽が流れる3分間で持ち場に移動し、12分間無言で掃除に取り組む。同じ持ち場の生徒とも原則的に話さないため、周りの様子を見ながら、自分で掃除が必要なところに気付いて行うという意識が求められる。美化意識を高めると共に、集中して取り組めば作業効率が上がることを体感する場でもある。

● **携帯電話マナー4原則**
ホームルーム委員会が中心となり、携帯電話に関して次の4項目を決めた。①校内持ち込みの禁止、②夜9時以降使用しない、③1日の使用は30分以内、④公共交通機関、歩行中の使用禁止。

3年生は、教師の助言を参考に、自分たちだけの力でやり遂げるという意欲を強く持ち、また、後輩に見られていることを常に意識して行動しています。勝ちたい、運動会を盛り上げたい。そのためにはどうすればよいかを話し合い、試行錯誤している姿には頼もしさを感じます。生徒が自己肯定感を最も得られる機会の1つでもあります」（副島先生）

生徒が自律を体現する取り組みは他にもある。「全校・学年集会時での無言集合・整列・解散」「無言清掃」「ワンストップ挨拶」「西高生の携帯電話マナー4原則」などである。

「無言清掃を始めて3年目ですが、活動は根付き、時間になると生徒は黙々と清掃します。細かい汚れに気付く生徒もいて、驚かされることもしばしばです。また、生徒は急いでいても立ち止まって挨拶します。教師が生徒から学ぶべきことは多く、そうした姿を褒め、他の先生とも共有するようにしています」（堀先生）

粘り強く頑張った過程を残し自己肯定感にも結び付ける

学習指導でも、生徒が自ら取り組めるよう様々な工夫をする。その1つが、定期考査2週間前に配布する各教科・科目の出題分野一覧表だ（**図3**）。生徒は取り組んだ分野を塗り、進捗を確認しながら学習を進める。

「この表があれば、生徒は試験までの自分の予定を考慮して学習計画を立てられます。担任も『部活動の遠征があるから早めに取り組んだ方がよい』などと、生徒個々に応じた声掛けをしています」（野村先生）

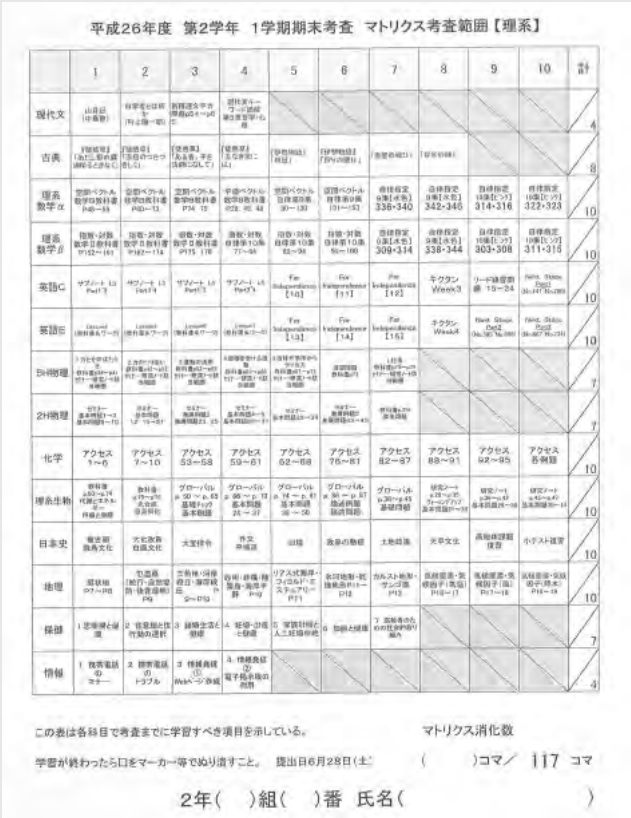
試験後は用紙を担任に提出。担任は、塗ったコマ数と試験の得点との相関を見る。全部塗ってあるのに得点が思わしくなければ、学習方法に問題があると分かる。全て塗っていなくても高得点であれば、しっかり学習することで学力向上が期待できる。そのように分析した結果を面談の材料にし、生徒の学習方法の修正や意欲向上に結び付ける。

生徒が学習方法を修正する機会として最も活用するのは、定期考査と校外模試だ。教科・科目別にノートを用意し、間違えた問題を再度解き、どこでどうつまずいたのか、ポイントとなる点を書き込む。

そうした復習を徹底させているのが、3年生で夏・秋各3回行われる東京大入試対応模試だ。東大クラスの生徒は全員受験するが、テスト終了後に答案をコピーし、すぐに各教科担当が採点する。生徒は、その全教科・科目の結果を1冊のノートに貼って1問ずつ解き直し、気付きや改善点を書き込む。そのノートを各教科担当が見て、良い気付きには下線を引くなどしてコメントを書き、最後に校長が激励の言葉を記して返却する。更に、業者採点の返却後、成績一覧表で自分の位置を確認する。

「東大クラスでは東大入試に特化した演習を行っていますので、授業で取り組んだ演習の類似問題が模試に出ることがあります。そうした指摘を生徒にして、普段の学習の大切さに気付かせています。更に、教師の模範解答と業者の模範解答とを見

図3　定期考査の出題分野一覧表（2年生1学期の期末考査）



平成26年度　第2学年　1学期期末考査　マトリクス考査範囲【理系】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
現代文	山月記（中島敦）	自学者とは何（竹山道雄）など	教育道全半ホ（教育のスキール他）	現代文キーワード読解 論理思考トレーニング他							4
古典	『徒然草』「あだし野の露消えぬところ」など	『徒然草』「花は盛りに」など	『徒然草』「ある者、子を法師になして」	『徒然草』「丹波に出雲という所あり」	『伊勢物語』「昔、男ありけり」	『伊勢物語』「筒井筒の井」	『徒然草』「世間の人の見ること」	『徒然草』「ある時の帝」			8
理系数学α	空間ベクトル 数学B教科書 P40～45	空間ベクトル 数学B教科書 P46～53	空間ベクトル 数学B教科書 P54～57	空間ベクトル 数学B教科書 P58～62	空間ベクトル 自作演習集 30～39	空間ベクトル 自作演習集 [1]～[3]	微積総定 分類[イ系] 336～340	微積総定 分類[ホ系] 342～346	微積総定 分類[ヘ～ト] 314・316	微積総定 分類[ロ～ハ] 322・323	10
理系数学β	微積・対数 数学B教科書 P112～116	微積・対数 数学B教科書 P117～118	微積・対数 数学B教科書 P119 119	微積・対数 自作演習10集 70～84	微積・対数 自作演習10集 85～98	微積・対数 自作演習10集 99～100	微積総定 分類[ムキ系] 309・314	微積総定 分類[ムホ系] 338・344	微積総定 分類[ヘ～ト] 303・308	微積総定 分類[ロ～ハ] 311・315	10
英語C	サブノート L3 Part 3	サブノート L3 Part 4	サブノート L3 Part 5	サブノート L3 Part 6	For Independence [10]	For Independence [11]	For Independence [12]	キクタン Week3	リーダー練習問題 15～24	Note, Study Guide (No.36) No.38	10
英語B	Unused（教科書&プリント）	Unused（教科書&プリント）	Unused（教科書&プリント）	Unused（教科書&プリント）	For Independence [13]	For Independence [14]	For Independence [15]	キクタン Week4	Note, Study Guide (No.38) No.39	Note, Study Guide (No.40) No.39	10
B+物理	1カロリモデルとその熱容量 2 教科書P40～41 ガイド一覧表1～4頁 熱容量	2 カロリーの保存 教科書P42～47 ガイド一覧表1～4頁 熱伝導	3 運動の法則 教科書P48～51 ガイド一覧表1～4頁 運動量	4 慣性質量 重力 教科書P52～55 ガイド一覧表1～4頁 万有引力	5 慣性モーメント 教科書P56～61 ガイド一覧表1～4頁 剛体	運動量 教科書P62	1日目 教科書プリント ガイド一覧表1～4頁 円運動				7
2H物理	ガイド一基本問題1～12	ガイド一基本問題 ①～⑤	ガイド一 熱運動編 基本問題21～25	ガイド一 電磁気編 基本問題1～11	ガイド一 基本問題1～24	ガイド一 基本問題1～4	教科書&プリント 原子編				7
化学	アクセス 1～6	アクセス 7～10	アクセス 53～58	アクセス 59～61	アクセス 62～68	アクセス 76～81	アクセス 82～87	アクセス 88～91	アクセス 92～95	アクセス 各例題	10
理系生物	教科書 p.30～34 代謝とエネルギー 呼吸と発酵	教科書 p.47～51 光合成 窒素同化	グローバル p.50～p.53 遺伝子の基本問題	グローバル p.56～p.57 基本問題 21～27	グローバル p.14～p.17 基本演習 28～30	グローバル p.30～p.37 酸塩基 酸化還元	グローバル p.38～p.43 基礎問題	研究ノート p.39～p.40 ウォーミングアップ 基本問題1～10	研究ノート p.39～p.40 基本問題11～18	研究ノート p.40～p.42 基本問題19～21	10
日本史	縄文新 農耕文化	大化改新 古墳文化	大宝律令	荘園	出題	政治の動揺	土地開発	天平文化	高地産業開発	小テスト復習	10
地理	現状地 p7～p10	宅造業 地盤・地質・地形・地震基礎 P8	三角州・河川 砂丘・海岸線 P9	砂州・砂嘴・陸繋島・海岸平野 P10	リアス式海岸・フィヨルド・エスチュアリー P11	各河地形・氏 地域調査ポイント P12	カルスト地形・サンゴ礁 P13	扇状地・氾濫原・気候因子（高温） P14～17	風成堆積・気候因子（風温） P17～18	高緯度・低緯度・気候因子（降水） P18～19	10
保健	1 思春期と保健	2 性意識と性行動の選択	3 結婚生活と健康	4 妊娠・出産と健康	5 家族計画と人工妊娠中絶	6 母親と胎児	7 医療者からの社会的責任				7
情報	1 携帯電話のマナー	2 携帯電話のトラブル	3 情報倫理 Webページ作成	3. 情報倫理 電子掲示板の利用							4

この表は各科目で考査までに学習すべき項目を示している。　マトリクス消化数

学習が終わったら口をマーカー等でぬり潰すこと。　提出日6月28日(土)　（　　）コマ／117 コマ

2年（　）組（　）番　氏名（　　）

学年・コースごとに出題分野の一覧表を作り、定期考査の2週間前に配布する。以前は試験1週間前に配布していたが、生徒の希望により2週間前となった。教師側も試験日を見据えて配布後の授業を進めるようになり、生徒・教師双方にとって計画性を身に付ける機会となっている。
＊学校資料をそのまま掲載

比べて、解法は1つではないと気付かせ、多角的な視点を育成することも狙いとしています」（副島先生）

14年度は、東大クラスの生徒全員にビジネス手帳を配布した。日々の学習事項を書き記し、日々の生活や学習方法の軌道修正に役立てると共に、くじけそうになった時に手帳を見て、自分の努力を振り返り、気持ちを立て直すことが出来る重要なツールになると考えたからと、堀先生は言う。

「私たちは、生徒を褒めるだけでなく、『君たちの力ならもっと出来る』と言い、悔しい思いを向上心に結び付けるという指導をしています。歯を食いしばって頑張ってきたことを自己肯定できるように、手帳を見て、『今週は先週に比べて頑張った』、入試前に『1年間これだけ努力した』と実感できる機会になればと思います」

情報を共有して隙間を埋め、一枚岩となる

同校では、厳しく指導するが故に、教師間で生徒の情報を常に共有し、一人ひとりの状況に応じた指導を心掛けている。例えば、1年生では、教科共通で課題提出日を設定し、締め切りを徹底的に守らせている。締め切り日までに提出していない生徒を教科ごとに一覧表にし、学年団がそれをまとめて、生徒ごとの提出状況を把握するが、提出していない教科がいくつかあれば、それは単に怠けているだけなので、生徒を呼び出して厳しく指導する。一方で、もし全教科未提出であれば、何か問題があったのではないかと考え、生徒と面談するなどの対応を講じる。

「担任や教科担当など複数の目で生徒を見て得た情報を共有しているからこそ、生徒の変化を察知し、どう対応すべきか、学年団として判断できます。また、例えば提出状況があまりにも悪く、部活動を休ませて、放課後に取り組ませようとした場合でも、それは学年団の判断として、部の顧問から理解を得られやすいという面もあります」（副島先生）

3年生では、生徒の情報を共有する場として「進路検討会」や月1回の「東大クラス担当者会議」を開く。担任の方針はプリントにまとめて配布し、会では教科担当が授業等で気付いたことを話し、担任が指導の材料を得る場にしている。

「担任1人では生徒の見えない部分がどうしても出てきます。その隙間を埋めるのが検討会です。順調に進んでいると思っていた生徒に対して、修正すべき点が多いと他の先生が言うこともありますし、生徒の良い面を指摘されることもあります。自分の所感を率直に話せるような教師間の信頼関係を築いておくことは、生徒の成長や課題に対応した指導を行うためにも重要です」（堀先生）

教師の本気が生徒の考えを深める

丁寧な生徒把握は面談に生きてくる。どの学年も面談週間が年6～9回設定され、それ以外にも担任が適宜行う。担任が、学力、伸びしろ、性格、精神状態など、様々な教師から聞いた情報を基に説得力を持った話をするため、生徒もより自分を見つめることが出来る。野村先生は、ある卒業生の言葉が印象に残っていると話す。

「現役では東京大に不合格で、1浪で大阪大に進学した卒業生が、『先生と何度も話し、自分でも一生懸命に考えたから、第1志望ではなくても大学生活が楽しい』と言ったのです。悩み、つまずき、教師の言葉に気付かされ、そうして考え抜いて決めた経験が、その後の人生でも生きていき、いつかまた壁にぶち当たっても必ず乗り越えていってくれると信じています」

教師が本気で接することが、生徒に内省を促すのだろう。

「私たちは生徒に高い目標を示し、厳しい指導をしますが、それは生徒が自らの潜在能力に気付き、それを開花させ、大きく成長してほしいからです。教師側も、生徒の変化に敏感に気付き、生徒の心に訴え掛けられるような指導をしていきたいと思います」（堀先生）